絵本の色調変化による効果
～幻・異世界にまじわる登場人物～

The effect by color tone change of a picture book
～Characters which visit the next world～

池　田　彩　実
Ayami Ikeda
中　嶋　真　弓
Mayumi Nakashima

はじめに

絵本は本と比べ絵が占める比重が大きい。とはいっても絵だけを見ていてもいけない。絵本が「絵画的要素と文学的要素の両側面をもっている」[1]ことに異論はなく、絵と文（テクスト）の関連性をじゅうぶん念頭におく必要がある。

かつての絵本は、コストの面から白黒印刷だったり数色を指定した印刷だったりしたが、今やフルカラー主流の時代である。色彩豊かな絵で構成される絵本は多くあるが、あえて抑えた色味が選択される場合もあり多種におよぶ。中には、一定の色彩を保っていたがある時ふと色の調子をくずす絵本がある。色調の変化がもたらす効果について、三冊の絵本を取り上げて考察する。

1．色の強調―マーク・クラウス『はなをくんくん』

色は、絵本を構成する大切な一要素である。どこにどの色を置くか、画家による緻密な計算がされていよう。色を目立たせるための一例を挙げる。

『あかがいちばん』[2]に色調の変化はないが、注目させたい色を際立たせるような工夫が目立つ。使われる色は、赤・青・黄・緑といった限られた数色だ。青は網かけ（ドット）で薄くしか印刷されず、主人公の女の子が大好きな“赤”を強調する。どのページを見ても、明度・彩度ともに高い赤が目に飛び込んでくる。主役となる“赤”のため他の色は抑えられているのだ。

今では本屋に行くと色鮮やかな表紙の絵本が目につく。反対に白黒の絵本も多数存在し、定番になっているものもある。それらの作者はどのような状況で白黒を選んだのか。まず、以前の印刷技術を振りかえる。

かつて、写真製版によるカラー印刷の精度がじゅうぶんでなく、コストが高かった時代には、

絵本の絵は、『100まんびきのねこ』（ガアグ）や『もりのなか』（エッツ）、『かもさんおとおり』などのように、黒やセピア一色のものや、『アンガスとあひる』（フラック）や『三びきのやぎのがらがらどん』（ブラウン）、『ラチとらいおん』（マレーク）、『どろんこハリー』（ジオン作、グレアム絵）などのように、限られた二、三色を版画のように使ったものが主流でした。ところがいまでは、どんなにたくさんの色を使い、どれほど緻密な描写をした原画でも、たいしてよぶんなコストをかけずにきれいに印刷することが可能になっています。[3]

たとえコストの制約があったとしても、作者たちは「制約を逆手にとって、子どもたちにとって最高のものを作るすべを心得ていた」[4]。ここで、“白黒”印刷がメインである『はなをくんくん』[5]を例に挙げる。

表紙・裏表紙の前面に黄色が使用されているが、本を開くと“黄色”の登場が大切にあたためられていると気づく。白黒のページが続き、有彩色がなかなか出てこないのだ。

絵は木炭で描かれたような黒一色である。豊かな階調によって、雪が降っている冬景色と冬眠する動物たちがあらわされる。すると、眠っているのねずみ、くま、ちっちゃなかたつむり、りす、やまねずみ（ウッドチャック）が急に目を覚まし、物語が展開する。「はなをくんくん」しながら「みんなかけて」行く。かけていった先には、春の兆しをあらわす“黄色い花”が一輪咲いている。周りにはまだ雪が降り続けていることから、現実ではなく幻の花かもしれない。色のつけ方も動物に比べて平面的で、浮いているようにも見える。しかし、唯一の有彩色（黄色）で着色された花が“動物たちにとって喜ばしい春”の到来を象徴している。

また、眠っている場面とはなをくんくんしながら駆け出す場面には時間の推移がある。のねずみとかたつむりの画面を見比べると特によくわかる。ずっと降っていた雪がさらに積もり、画面は白さを増す。丘や木に積もる雪量も増える。テクストを見ても、「のねずみがねむってるよ、…（同様にくま・かたつむり・りす…筆者補。）…やまねずみ（ウッドチャック）がじめんのなかでねむってるよ。」まで一文で示される。

黄色を含め他の有彩色をはじめから使っていては、ここまで読者をひきつけられない。“長い間待ち望んだ春”が、最終画面に置かれた一点の“黄色”に集約されているといえよう。

2．異世界との逆転―ジョン・バーニンガム『おじいちゃん』

左右のページでセピア色とフルカラーを使い分けた絵本がある。ジョン・バーニンガムの『おじいちゃん』[6]だ。おじいちゃんと孫娘の短い会話文で構成され、地の文はない。原文[7]では孫娘のことばが斜体字で表され、GRANPA の発言と区別されている。谷川俊太郎訳の日本語版に差異はない。主におじいちゃんと孫娘がいるページはフルカラーで右側に描かれる。左側は上に会話文、下に絵がセピア色で描かれる。カラーページは現実、セピア色のページは夢や幻想の世界・過去・未来など、現実とずれた時空間を描くことが多い。[8]

二種の絵のうち、右ページに配される着彩画はその場の状況を表すが、左ページの単色スケッ

チ風の方は、想像上の情景や過去や未来の様相など、異空間を表現していて、それが何かの説明はない。[9]

第四画面を例に挙げよう。右側（カラー）にお医者さんごっこをしている二人が描かれ、おじいちゃんは「ぬいぐるみのくまがおんなのこだなんてしらんかったよ。」と言う。左にはドレッサーの前で化粧をするぬいぐるみのくまがセピア色で描かれる。ワンピースを着てハイヒールを履き、ネックレスまでつけている。これは夢や幻想の世界に分類できよう。現実（カラー）のくまは患者役で、服を着ずに医者役のおじいちゃんのひざにいる。ナース役の孫娘は、口を開けきょとんとした顔でおじいちゃんのかたわらに立っている。

左（セピア・ずれた時空間）右（カラー・現実）といった、左右を書き分ける形式はほぼくずされることがないが、いくつか例外がある。

一つ目の例外は第六画面、左右ともにカラーページである。おじいちゃんと孫娘の仲違いが描かれ、左ページに孫娘、右ページにおじいちゃんが立っている。おじいちゃんは「おじいちゃんにむかってそういうくちのききかたはないだろ。」と言うが、孫娘からの返答はない。孫娘は左ページ中央に真横を向いて立っている。おじいちゃんに背を向け、全身は左に向けている。腰に手を当てて口を尖らせ、すねたような横顔だ。おじいちゃんは右ページの右よりに新聞を持って立っている。顔と体はやや正面に向いて反対側にいる孫娘を気にしているようだ。人物の位置に注目すると、おじいちゃんがいる右ページの左半分が空白である。通常なら二人でいるはずの右ページから、孫娘が左ページへ出て行ったようにも見える。

続く第七画面は、おじいちゃんの家の庭でままごとをする二人が見開きいっぱいにカラーで描かれている。二つ目の例外である。孫娘が土で作った「いちご・あいすくりーむ」をおじいちゃんは食べている。人物以外は描かれなかった第六画面とはうって変わってにぎやかな画面である。おじいちゃんはアイスを「ちょこれーと」味だと勘違いしたが、二人の仲は元通りになったと知って読者は安心する。

第七画面あたりから、春から夏へ季節が移り変わる。「いちご・あいすくりーむ」を食べるおじいちゃんと孫娘は半袖を着ており、第八、九画面は浜辺に出かけている。第十一画面では、湖で釣りをする二人の頭上に紅葉した木が描かれる。湖には落ち葉が浮いたり沈んだり、服装もすでに秋である。第十二画面には、雪が積もる道を散歩する二人がいる。木の葉も落ちた冬景色だ。

第十三画面は、体調をくずしたおじいちゃんが描かれる。パジャマにガウンを羽織りひざ掛けも使って暖かくして、ひじかけイスに座っている。サイドテーブルには薬やコップが置かれる。左側には氷枕や体温計を描き、「きょうはそとであそべない」おじいちゃんの病気を強調する。

第十四画面は、ほぼ回復したおじいちゃんが現れる。孫娘をひざにのせてひじかけイスに座り、一緒に子ども番組を見ている。おじいちゃんの手にはパイプ、サイドテーブルにはマッチが置かれ、普段の生活に戻れそうな様子がうかがえる。孫娘の言葉は「あしたはいっしょにあふりかへいって、おじいちゃんはせんちょうになってくれる？」で、しばらく一緒に遊べなかったおじいちゃんとの時間を楽しみに待っている。

第十五場面で、突如おじいちゃんがいなくなってしまう。主をなくしたひじかけイスが、おじいちゃんの死を物語る。右ページにはひじかけイスとサイドテーブルが弱々しい輪郭のカラーで描かれ、空虚な印象を読者に与える。左ページには、イスの上にひざを抱えて座る孫娘がセピア色で描かれている。三つめの例外である。今まではカラーで描かれていた人物（孫娘）が急にセピア色で示され、読者の目を釘づけにする。孫娘は無言・無表情でぽつんと左ページ中央にいて、右ページのひじかけイスを見つめている。影のような斜線も描かれていない淡白な絵だ。おじいちゃんの不在をただ見つめるしかない孫娘の空白な思いをあらわしている。イスの上にしゃがむ彼女の足は地面についていない。イスがなければ肉体が宙に浮いている孫娘の体勢は、祖父の喪失という不安定さをも表現しているといえる。

ここでひじかけイスについてまとめよう。おじいちゃんは、初登場シーンから緑色のひじかけイスに座っている。その後もたびたび出てくるひじかけイスはおじいちゃんの定位置であり象徴でもある。第十五画面の誰も座らない緑色のひじかけイスは、おじいちゃんの死を視覚的に印象づける。セピア色で描かれた孫娘は、現実世界から異世界へ移ってしまったかのようだ。彼女は異世界からおじいちゃんのひじかけイスを見つめ、おじいちゃんとの日々を思い出しているのかもしれない。あるいは、第一画面から始まる二人のエピソード自体が、すでにおじいちゃんを亡くした第十五画面の孫娘による回想だとも解釈できる。

バーニンガムは、最終画面である第十六画面（見開き半ページ、左側のみ）をカラーの背景で描いている。絵のみでテクストは書かれない。夕暮れ時だろうか、太陽が地平線に近いころにベビーカーを押して丘を走る孫娘の絵だ[10]。髪のなびき方から彼女が疾走しているとわかる。うしろからは犬がついて走る。犬は第七画面でおじいちゃんの足元に寝そべって登場しており、おじいちゃんの家の犬だと考えられる。

第十五画面で終わらせると、淡泊な筆致で描かれたセピア色の孫娘によって読者は非常に空虚な気持ちで絵本を閉じることになる。人間の死とは空虚で受け入れがたいものではあるが、これでは気持ちが浮いたまま落ち着かない。たとえ大切な人が死んでも残された人間は生きていかなければならない。バーニンガムは、最終画面を背景のみカラー、孫娘には着色しなかった。全くのカラーにはしないことで孫娘のやるせない思いやつらさを残そうとしたのではないか。色彩あふれる画面は現実や充足を感じさせ、単色は非現実やさびしげな印象を与える。前述のとおり、仲違い後の画面はフルカラーで描かれ幸せいっぱいの様子だった。カラー背景の中に無着色の人物を置くということは、現実を見なければならない孫娘の状況とそれでも空白が埋まらない心情を同時に表現している。

3．朝もやと夕暮れ―ガース・ウィリアムズ『しろいうさぎとくろいうさぎ』

最後に『しろいうさぎとくろいうさぎ』[11]を取り上げる。この絵本は、色数や明度・彩度を抑えた色使いがなされる。使われる色が鮮やかならば店頭などでより人目をひくが、色彩が豊かであれば豊かであるほどよい絵本だとは限らない。まず、絵本における色の調子をまとめたものとして、以下の文章を引用する。

色には、赤や青や黄のようないわゆる色（色相）とともに、同じ色でも鮮やかな色であったり、くすんだ色（彩度）の要素や、明るさ（明度）の違いなどがあり、絵ではこうした三つの要素が微妙に関係しながら、絵の色の雰囲気、色の調子を構成している。絵本は、こうしてつくられた一つ一つの絵が連続して展開するため、画面と画面のあいだにも色調の違いが生まれる。（中略）絵本はさまざまな色調とともに、こうした色の効果を画面ごとに変化させることにより、ストーリーや、絵の描写内容とあいまって、絵本のなかで展開する感情表現をさらに効果的に演出することも可能なのである。[12]

『しろいうさぎとくろいうさぎ』は黒・黄・青の三色印刷なので、白・黒・黄・緑・青の五色によってのみ描きだされる。野うさぎを主人公としており野原を背景とした緑色の画面が多い。ほぼ同じような色調が続くが、そのなかに彩度・明度が極端に低い画面が三つある。

一つ目は第二画面である。一文目のテクストは「しろいうさぎとくろいうさぎ、二ひきのちいさなうさぎが、ひろいもりのなかに、すんでいました。」とあり、霧かもやがかかったような森に二匹のうさぎが描かれる。二匹の外側に黄色い花がいくつか咲いている。黄は花のみ、緑は森の木や草の一部分にだけ着色されている。全体的に灰色の画面だ。第三画面には、「まいあさ、二ひきは、ねどこからはねおきて、あさのひかりのなかへ、とびだしていきました。そして、いちにちじゅう、いっしょにたのしくあそびました。」と書かれる。ここから、第二画面のもやは早朝のもやだと推察できる。原文にも、「Every morning they hopped out of bed and out into the early morning sunshine.」[13]（下線は筆者による。）とあり、朝日が昇る時間帯であることがはっきりしている。

第三画面以降、くろいうさぎが「かなしそうなかおで」考えこむ場面は全体的に黄緑色の野原が続く。

第十三画面で二匹は結婚式を行う。色調が変化する二つ目の画面である。全体的に青っぽい灰色の中に二匹が耳にさしたタンポポの黄色だけが色鮮やかに浮かびあがり、緑の草場はわずかである。画面右には真っ白な満月が出て、他のうさぎたちが輪になって踊りはじめる。満月の描写から、二匹が野原で遊んでいた日中は終わり日が暮れて夜になったと分かる。

第十四画面ではさらに明度が落ちる。タンポポの花以外はほぼ無彩色で表現されるこの画面が、三つ目である。森に住む動物たちがうさぎのダンスを見に来ている。テクストには「（前半略[14]）あかるいつきのひかりのなかで、ダンスはひとばんじゅうつづきました。」とあるが、明るい光を放つ月は描かれない。空の部分はごく薄く青がかっているだけでほぼ薄いグレーだ。ハーフトーンの中に、二人の幸せを示す黄色い花だけが浮かび上がっている。月の光を照り返すのはタンポポだけのようだ。

第十四画面の原文では「The other animals of the forest came to watch the wedding dance and they too danced all night in the moonlight.」[15]（下線は筆者による。）と語られ、画面には描かれていない月光（moonlight）の語がある。対して、第十三画面は月が描かれてはいるが「moon」や「moonlight」の語がない。つまり第十三・十四画面にページの区切りはあるが、一

つの場面としてまとめることができる。

第十五画面が最終画面、結婚式の後日譚である。昔話にあてはめるならばめでたしめでたしという終結部だ。全体的に緑色の画面に草を食む二匹が描かれ、テクストによってハッピーエンドが語られる。テクスト最後の一文は、「それからというもの、くろいうさぎは、もうけっして、かなしそうなかおはしませんでしたって。」である。それにもかかわらず二匹の表情は明るくなく、むしろ無表情で単なるウサギの描写だといってよい。

二匹はこれまでの物語中で、楽しげな顔、悲しげな顔、驚いた顔、幸せそうな顔など、人間のようにさまざまな表情を披露してきた[16]。動作にしても、第十二画面の手（前足）を取り合う姿や、表紙と裏表紙の二足歩行で前足を手のように使うしぐさは、非常に人間的である。しかし最終画面では無表情で草を食んでおり、ウサギ本来の姿が見えるのはなぜか。

ここで色調の変化にもう一度注目したい。三枚の灰色の画面は、始めに一枚と終わりに二枚おかれている。第三画面から第十四画面では、二匹のうさぎの一日を追っていることがテクストから読み取れる。灰色の画面は「sunshine」と「moonlight」の時間帯を示し、それにはさまれる物語内容は二匹のうさぎが結婚する一日だ。原題『THE RABBITS' WEDDING』そのままである。二か所の灰色の画面にはさまれた二匹のうさぎは、まるで人間のように遊び、悩み、会話し、結婚式を挙げるのだ。

朝もやで始まり夕暮れ（日没）で区切られたうさぎは、現実世界とは違った空間に置かれている。二つある灰色の画面は、物語内にある虚構世界の額縁の役割を果たしているといえよう。灰色の画面を境として、生物学的な“ウサギ”から人間的な生活をおくる“しろいうさぎとくろいうさぎ”に変容し、再び元に戻るのだ。よって、月明かりに照らされる結婚式の夜を過ぎた二匹のうさぎは、まるで本物のウサギのような姿やしぐさで描かれているのである。

おわりに

絵本における色調の変化は、読者の意識をひきつけることができる。鮮やかな色の中にモノトーンを、またモノトーンの中に鮮やかな色を一部挿入すると、より印象を強めることになる。明度や彩度の利用も作者によるしかけである。このような効果は、日常世界から少し外れた世界を描き出す方法の一つでもある。絵本の登場人物はしばしば異世界に「行って帰る」[17]という構造をもつ。そんな非日常の世界をおとずれる登場人物の姿や場面を見ると、読者は注意をひかれてふと立ち止まる。疑問をもったり絵本のテーマについて考えたりする。

絵本内の変化は感慨深さや余韻を感じさせ読者に考えるきっかけを与える。考える対象は生の喜びや死、対人関係などさまざまである。絵本の画面からしか導き出せない解釈やテクストと一体になってはじめて読みとれるメッセージなど、前面には出てこない問題提起もあるだろう。絵本は、字だけではなく、絵を併せて読むものである。色調の変化は「絵本」という表現が読者に考えるきっかけをもたらす手段と考えられる。

［注］

1　松本猛『絵本論：新しい芸術の可能性を求めて』岩崎書店　1982.2.10　p87

2　キャシー・スティンスン文 ロビン・ベアード・ルイス絵『あかがいちばん』ほるぷ出版 2005.11（『RED IS BEST』1982）

3　脇明子『読む力は生きる力』岩波書店 2005年1月18日 191p. pp62-63

4　3に同書　p63

5　ルース・クラウス文 マーク・サイモント絵 きじまはじめ訳『はなをくんくん』福音館書店 1967.3.20（『THE HAPPY DAY』1949）

6　ジョン・バーニンガム作 谷川俊太郎訳『おじいちゃん』ほるぷ出版　1985.8.15

7　John Burningham『GRANPA』Jonathan Cape　1984

8　セピア色で描かれるページの分類

夢や幻想の世界	第四画面	化粧をしているぬいぐるみのくま（女の子）。ネックレス、背中にリボンがついたワンピース、ハイヒールを身につけている。
	第十一画面	湖で「くじらがつれた」時に竿を引かれるおじいちゃんと、おじいちゃんが湖に引きずり込まれないように足を抱えて支える孫娘の様子。
	第十四画面	船が、船体の何倍にもあたるたくさんの煙を空に浮かべる様子。船はおそらくアフリカ行きであろう。右奥に黒い陸地のようなものが見える。
（近）未来	第八画面	浜辺へ行く日の、「おちゃにかえって」こないといけない四時のテーブルの様子。お茶とケーキが用意されており、花も生けられている。
	第九画面	浜辺の砂で作り上げられた作品。現実は作っている途中である。サンダルやシャベル、ヒトデ、貝殻が近くにあり、孫娘のものだと思われる足跡が残っている。
過去	第十二画面	「あるとしのくりすます」に子どものおじいちゃんが、はりーとふろーれんすと一緒に「やのように（おかを）すべりおりた」様子。一つのソリに乗っている三人組がそうであろう。他の子どもたちや動物もソリすべりや雪だるま作りにいそしみ、雪におおわれた丘を楽しんでいる。
他空間	第二画面	じょうろや植木鉢、植物の種の袋、小さな苗、シャベルなどの道具類。
	第三画面	男の子二人と女の子一人がオルガンに合わせて歌をうたっている。第十二画面に登場するハリーとフローレンスとおじいちゃんの子ども時代だとも考えられるが詳細は不明。女の子の髪型はおさげで第十二画面のフローレンスと合致するが、男の子二人には共通点が見られない。
	第五画面	雨もようの池で飛び跳ねているカエル。池には蓮の花や葉。
	第十画面	テニスのラケットやボール、ハンマーなど。幼年時代のおじいちゃんの遊び道具だと考えられる。クモの巣がかかっていることや枯葉のたまり具合から、長年使われていないことや年月の経過がうかがわれる。
	第十三画面	氷枕やガラスのコップ、体温計、飲み薬の容器、錠剤の薬など。

9　灰島かり編『英米絵本のベストセラー40：心に残る名作』ミネルヴァ書房　2009.7.10　p136

10　丘の考察

第十二画面で、子どものころのおじいちゃんは、友人か兄弟だろうハリーとフローレンスと一緒に丘をソリで滑り降りた経験がある。雪の積もる日の散歩で、おじいちゃんは「はりーとふろーれんすとわしはあのおかをやのようにすべりおりたものさ。」と話す。散歩コースが丘の近くだと考えられよう。孫娘がベビーカーを押して行ける距離にある。よって最終画面で孫娘が疾走する丘は、この場所だと考えられる。

また、表紙（日本語版）を見ると、車輪つきのソリにのったおじいちゃんと背中につかまる孫娘が坂道を滑り降りているシーンである。なお、この絵は本文中に登場しない。おじいちゃんは手に綱を持ち、斜面は芝生だろうか緑色である。雪は積もっていないが「あのおか」だと考えられる。おじいちゃんに抱きついて顔を寄せる孫娘は、幸せそうに微笑んでいる。おそらく最終画面の孫娘は、おじいちゃんとの思い出の場所のひとつである「あのおか」に向かっていると考察できる。

第十五画面に続いて最終画面でも孫娘は色を失ったままだ。無着色のまま疾走する孫娘は、思い出の丘に向かい、表紙のような“かつての色”を取り戻すことを暗示しているかのようだ。“色”には、現実性や前進、幸せが象徴されよう。亡くなった家族との思い出と共にあるということは、残された者にとって生き続ける助けとなる。孫娘は、おじいちゃんの思い出を胸に“色”を取り戻そうと走っているのではないか。

この着彩の有無は、最終画面を見終わった読者を同じ丘が描かれた表紙の絵へと導く。表紙には鮮やかな色彩があふれる。『おじいちゃん』は、「あのおか」を中心として絵に円環性をもたせた物語である。

11　ガース・ウィリアムズ作絵 松岡享子訳『しろいうさぎとくろいうさぎ』福音館書店　1965.6.1

12　松本猛『絵本論：新しい芸術の可能性を求めて』岩崎書店　1982.2.10　p106-107

13　Garth Williams『THE RABBITS' WEDDING』Harper & Row　1958

14　第十四画面のテクスト前半部分

「もりにすむほかのどうぶつたちも、ダンスをみにやってきました。そして、いっしょにおどりました。」

15　13に同書

16　二匹のうさぎの表情の例

楽しそうな顔…第三画面（しろいうさぎ）、第四画面（二匹とも）

悲しそうな顔…第五、六、八、九画面（くろいうさぎ）、

驚いたような顔…第十画面（しろいうさぎ）、第十一画面（くろいうさぎ）

幸せそうな顔…第十二、十三、十四画面（二匹とも）

17　瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社　1980.1.25　p6　（中公新書563）

［**参考文献**］

河合隼雄・長田弘『子どもの本の森へ』岩波書店　1998.2.3

河合隼雄・松井直・柳田邦男『絵本の力』岩波書店　2001.6.18

清水眞砂子『子どもの本とは何か』かわさき市民アカデミー出版部　2003.4.30（かわさき市民アカデミー講座ブックレット　No.17）

中川素子『絵本はアート：ひらかれた絵本論をめざして』教育出版センター　1991.8.4

永田桂子『よい「絵本」とはどんなもの？』チャイルド本社　2007.6.30

長谷川摂子『絵本が目をさますとき』福音館書店　2010.3.25

深田智“絵本に隠された視座と視線、身体的経験―『しろいうさぎとくろいうさぎ』の意味世界―”聖トマス大学　サピエンチア：英知大学論叢 45, 157-174, 2011-02

余郷祐次“絵本の色彩表現の研究―絵本『ぐりとぐら』の分析を中心に―”全国大学国語教育学会　全国大学国語教育学会発表要旨集 111, 181-184, 2006-09-30